

# 教育保育インターンシップⅡの現状と課題 —保育所・幼稚園の場合—

The current situation and the problems  
of Education Childcare Internship II :  
Case Studies of nursery school and kindergarten

成田 信子\*                      森田 健\*  
Nobuko Narita                      Ken Morita

## 抄録

本研究では、教員や保育士を目指す学生の実践的能力を磨くための新設科目「教育保育インターンシップⅡ」において、保育所・幼稚園での実施状況と、その中で得られた課題や問題点等について述べる。学生の学びが深まり、実践的能力の開発につながることがわかった。

## Abstract

This paper discusses problems and concerns regarding Education Childcare Internship II by examining students' internship performance in nursery school and kindergarten. Our findings indicate that through their internship experience student learning was further enhanced to deal with practical situation.

## 1. はじめに

保育士資格と幼稚園教員免許については、少子化にともなう行政上の必要性、社会における子育て支援のニーズの多様化等を背景に、両資格を同時取得しやすくするための養成課程等の見直しが行われている。認定こども園が制度化され、各市町村の幼稚園教員採用試験では、両資格を持っていることが受験条件に挙げられるところも出てきている。

今後児童福祉と教育の双方の観点から、乳幼児の育ちを見ていくことはますます重要性を増すことが予想される。本学の教育学部教育福祉学科こども学専攻では、両資格に加え、小学校教員免許、特別支援学校教員免許取得が可能であるが、それぞれの養成課程の関わりを明らかにしてカリキュラムの整備を急いでいるところである。そのカリキュラムの柱の一つが実践的能力あるいは実践的指導力の育成である。

---

\* 関西国際大学教育学部

## 教育保育インターンシップⅡの現状と課題

保育士養成および初等教育教員養成の立場から、専門性ととも実践的能力あるいは実践的指導力が話題になることは多い。厚生労働省の保育士養成課程等検討委員会が平成13年2月に発表した「今後の保育士養成課程等の見直しについて（報告）」には「実践力や応用力をもった保育士を養成するため、施設現場における実習の強化」が挙げられている。また文部科学省の幼稚園教員の資質向上に関する調査研究協力者会議が平成14年6月に発表した報告書「幼稚園教員の資質向上について―自ら学ぶ幼稚園教員のために―」においても「養成段階における課題と展望」のなかに「実践力の育成」の項があり、次のような記述が見られる。

採用されて間もない教員の中には、実践力の基礎に欠ける者が散見される。在学中に幼稚園の現場を経験する機会が教育実習以外にほとんどなく、幼稚園教員という職業のイメージをつかみ、理論と実践とを結び付ける機会や、教員志望者自身の豊かな生活体験が欠けている点が課題と考えられる。

養成機関においては、大学改革の一環などで、カリキュラムの検討や授業に関する評価制度を通じて、実践的な指導力に対するニーズへの対応の改善に努めることが重要である。そのためには、養成機関が、幼稚園との連携を強化し、幼稚園現場からのニーズをもとに、カリキュラムや授業の中で理論と実践を結び付けることや、学生に、早い段階から、インターンシップなどにより幼稚園現場での実践を経験する機会を与えることなどの工夫をすることも重要である。（傍線引用者）

これらの指摘が示しているのは、大学の講義内容に加えて、現場における実践体験を豊かにする必要性ということであろう。後者の指摘においては、現場における実践体験の不足を補うために、より踏み込んだ形でインターンシップの提案もなされている。

各大学における幼稚園・保育所でのインターンシップは、小学校におけるインターンシップの取り組みに比べまだ多くはない。両資格はこれまで短期大学や専門学校が担ってきたということもあり、2年間という修業年限のなかでは、インターンシップを科目として立ち上げるのはむずかしいことも関係していると考えられる。一方でより広い概念のボランティアは奨励されている。

保育士養成課程での取り組みの事例として、新見公立短期大学が地域の公民館「地域子ども教室」で手遊び、紙芝居等を行ったボランティア活動が報告されている。その成果は「少子化により子どもに実際に触れることの少ない学生が、さまざまな角度から子どもたちを理解する貴重な体験」「子どもたちを対象に遊びを具体化していく、という点から実践力への視野と、既習理論や学習課題へのアンテナを得る」とまとめられている。同時に時間の調整が課題に挙げられている。

幼稚園教員養成課程での取り組みの事例として、華頂短期大学が幼稚園で夏期保育、運動会、生活発表会等への参加をするインターンシップが報告されている。成果は「幼稚園教員の資質として本質的な部分を感じ取っている」と記述され、課題として教育実習での成果の検証が挙げられている。

これら二つの事例は一定の成果を上げていると評価できるが、いずれも科目として単位を出しているわけではない。本学では、2008年度より実践的能力を育成する一環として「教育保育インターンシップⅠ、Ⅱ、Ⅲ」を1年、2年、3年にそれぞれ科目として位置づけ開講した。本稿では、2年生の「教

育保育インターンシップⅡ」の実施状況をもとに、保育所、幼稚園の場合の具体的活動内容を報告して問題点を整理し、保育士養成課程、幼稚園教員養成課程におけるインターンシップの意義について考察する。

## 2. 保育所・幼稚園における教育保育インターンシップのねらいと内容

### 2-1 教育保育インターンシップのねらい

関西国際大学では、2005年度から人間学部人間行動学科の中に「幼稚園教諭及び保育士」の資格取得を目的とした、幼稚園教諭・保育所保育士の養成コースを立ち上げ現在に至っている。いわゆる目的養成と呼ばれるものであるが、資格取得に必要な科目の履修はもちろんのこと、教育実習（幼稚園教員資格必修科目）や保育実習（保育士資格必修科目）を履修し、単位を取得することが必要である。

しかし実習にいきなり参加するよりも、その前に保育現場で職場体験を行うことは、教育実習・保育実習の効果を上げるためにも大きな教育的意義があると思われる。同時に幼稚園教諭や保育士に必要な実践的能力を高めるとともに自らの社会性や人間性を培うことにもなる。したがって、「教育保育インターンシップ」はこのような本実習をより充実させることをねらいとしている科目と言える。

### 2-2 教育保育インターンシップの内容

教育保育インターンシップは、1年次に行う「教育保育インターンシップⅠ」と2年次に実施の「教育保育インターンシップⅡ」及び3年次の「教育保育インターンシップⅢ」の3科目を開講しているが、ここでは2年次に実施している「教育保育インターンシップⅡ」の内容を紹介する。

①開講時期：2008年度の春学期（前期）は月曜日1, 2限（午前）、秋学期（後期）は月曜日3, 4限（午後）

②単位数：通年2単位

③対象：本学教育学部2年生

④講義概要：幼稚園教員や保育士をめざす学生が、学内での科目と関連させて、幼稚園や保育所（保育園）で職場体験を行うことにより、教員や保育士に必要な実践的能力を高めるとともに、自らの社会性や人間性を培うことを目的とする。

大学の講義で、インターンシップについての基本的事項を学び、各自課題意識をしっかりもって職場に行けるようにする。

各職場では、受け入れ機関の長の指示の下に、通常業務を体験する。業務活動については毎回活動記録をつけ、担当教員の指導を受けて課題を明確にし、次の活動に生かせるようにする。さらに、各職場での業務活動について小課題を設け、受講生同士の討議で問題解決力や判断力を鍛え、幼稚園教員や保育士としての実践的能力の向上をめざす。

⑤学習目標：

- ・自らの責任や必要と感じることをやり遂げることができる。 (社会的行動力)
- ・集団や社会の一員として、ルールやマナーをわきまえながら行動できる。 (順法性)
- ・問題に直面したときに、周りの人々の意見をよく聞いて、よりよい解決を考えようとする事が

できる。

(判断力)

- ・将来の進路について考えることができる。

(自律性)

⑥アサインメント(宿題)及びレポート課題:

- ・受け入れ機関との打ち合わせ
- ・活動記録
- ・小課題
- ・レポート

⑦成績評価の方法:

- ・出席及び職場での取り組みの様子(巡回指導,受け入れ機関での聞き取り)40%
- ・小課題(春学期2回,秋学期2回)20%
- ・活動記録20%
- ・レポート(春学期1回,秋学期1回)20%

⑧授業内容:事前指導,事中共導,事後指導および職場体験学習(インターンシップ)を含めて年間計30回の講義と体験学習を行っている。

<春学期>

第1回~3回・事前指導(インターンシップの目的と内容)

第4回~7回・各職場で業務活動。活動記録は翌日提出。

第8回・学内講義(事中共導)。小課題提出。

第9回~13回・各職場で業務活動。活動記録は翌日提出。

第14回・学内でグループ別の活動発表会(事後指導)。小課題提出。

第15回・学内で全体の活動発表会(事後指導)。レポート提出。

<秋学期>

第16回・学内で後半の職場体験に向けての事前指導。

第17回~22回・各職場で業務活動。活動記録は翌日提出。

第23回・学内講義(事中共導)。小課題提出。

第24回~28回・各職場で業務活動。活動記録は翌日提出。

第29回・学内講義(事後指導)。小課題提出。グループ別討議。

第30回・学内で全体の活動発表会(事後指導)。レポート提出。

### 3. 保育所における取り組み

#### 3-1 2008年度の実施状況

##### (1) 三木市・神戸市の受け入れ先保育所

2008年度科目開設にあたり,大学が所在する三木市および近隣の神戸市の保育所を受け入れ先の候補として協力依頼をすることになった。依頼にあたってはこども学専攻の教員がまず三木市保育協会に出かけて趣旨説明と協力依頼を行い,さらに市内全保育所14カ所(公立4私立10)に質問紙調査で受け入れの可能性を打診した。神戸市については学生がインターンシップに通う利便性を考え,該当の保育所に直接依頼をした。こうした事前調査および事前依頼によって受け入れ先の候補になったのは,三木市10カ所(公立3私立7)神戸市4カ所(公立4)である。

保育所側の受け入れのニーズは全体としては高いとはいえなかったが,保育補助や特別に配慮を要す

## 教育保育インターンシップⅡの現状と課題

る子どもへの対応補助、環境整備に学生がかかわることについては歓迎する意向の保育所もあった。学生が出入りするることについての保育所の現状は、保育実習では年間かなりの数の学生を受け入れて学生を育てようという意識が高いが、インターンシップとなると未開拓の分野であり、まだ保育所側から積極的なニーズがあるという段階ではないといえる。

希望学生への事前指導によって、三木市6カ所（公立2私立4）神戸市4カ所の保育所でインターンシップを始めることになった。

### （2）インターンシップの活動内容

① 履修学生： 関西国際大学2年生 女子9名，男子4名，計13名

#### ② 担当した主な仕事内容

2008年度は時間割上の位置付けが、春学期は1,2限（9:00～12:00）、秋学期は3,4限（13:10～16:20）であったため、春学期と秋学期で仕事内容に違いが生じた。これは保育所の一日の流れと関係している。午前中は各クラスでの遊びが主になり、自由遊びのほか、歌や製作、紙芝居といった保育内容も含まれる。これに対して午後は午睡の時間をとり、そのあとは園庭で各年齢入り交じって自由遊びをすることが多い。インターンシップ内容も午前中の設定であった春学期には、保育の補助が中心であったが、午後の設定となった秋学期には、教材準備補助や環境整備がはいつてきた。春学期の保育所側の話から、午後は仕事内容が限定されることがわかってきたため、学生が時間割上可能な場合には秋学期も午前中に実施した。以下学生の記録から主な仕事内容を挙げる。

#### 春学期仕事内容

- ・一緒に遊ぶ ・着替え，手洗い，歯磨きの補助 ・排泄補助
- ・発達が遅れている子どもの援助
- ・出席ノート，連絡ノート回収，出席ノートのシール貼り
- ・体操，踊り，リズム遊びの手本や指導補助 ・楽器指導補助
- ・絵本の読み聞かせ ・ピアノの弾き歌い
- ・野菜，植物の水やり，草抜き ・土作り，プランター移動
- ・保育室掃除
- ・給食準備 ・給食時の声かけ
- ・ふとんひき ・午睡寝かしつけ

#### 秋学期仕事内容

- ・午睡寝かしつけ
- ・着替え補助 ・排泄補助
- ・一緒に遊ぶ
- ・教材，掲示物作成
- ・環境整備

インターンシップを就業体験ととらえると、子どもに直接関わるのではない周辺業務もまた重要である。秋学期の午後設定では、子どもたちが午睡している間に、男子学生が遊具の安全補強作業等の力仕

事を任されることもあった。受け入れ側の考え方によって、環境整備のような仕事をさせないで、教材作成を指示されたところもある。保育所によって仕事内容にはばらつきがあり、保育士養成のカリキュラムの一環としてみた場合、実習に出る前の2年生の段階として体験の中心に何をもってくればよいかの検討が必要である。

### 3-2 記録の分析

#### (1) 毎回の記録の積み重ね

教育保育インターンシップの特色の一つは、大学の科目として単位を出すことである。大学教員が責任をもって指導にあたるのだが、訪問指導に加えて記録による指導を重視している。

記録用紙の形式は、活動時刻、活動内容、感想等の3つの欄から成っている。インターンシップの曜日の翌日までに担当教員に提出し、担当教員はコメントを書いて返却する。

以下、春学期当初の記録と秋学期の記録を比べて、学生に育っている力について考えてみたい。

#### Aさんの4月28日(第1回)の記録より(感想抜粋)

ちゃんと子どもの目線になり、一人一人あいさつした。子どもから積極的に話しかけてくれた。子どもが2人同時に話していて一緒に聞いていたけどどう対応していいか分かんなかった。どろだんごを徐々に作ったうまくできなかったけど、子どもと一緒にできるようになった。子どもがどろごを服につけてきたのできちんと指導してわかってもらえた。片付けの指導はちゃんとする。

#### Aさんの10月20日(第11回)の記録より(感想抜粋)

外でも中でも遊んでいて、自分の思い通りにならないとたたくY君にはたたいたらすぐ先生がきてしかるという姿が見られました。中で遊んでいるときY君の隣にいて手が出る前に止める補助をしていました。またKちゃんは人の指をかむくせがあり、そばにいたけど早くて1本かまれました。先生たちも苦勞している部分でした。いくら周りを見ていても、子どもの方が早いと実感しました。視野を広げることの大切さを今日改めて学べた気がしました。(傍線引用者以下同じ)

#### Aさんの11月17日(第14回)の記録より(感想抜粋)

今日はいつもの先生がなくて代わりの先生が入っていました。1歳のMちゃんは寝起き先生を選ぶので、いつもの先生がいないことが分かって泣き出す姿が見られました。これがアタッチメントなんだなあと思いました。日に日に1歳児が靴下をはけるようになっていたりして発達の姿が見られ、うれしくなります。外へ行った時、1歳児が鉄棒にぶらさがっていてその力に驚きました。年長さんたちが降りてきた時、1、2歳児へちゃんと目をやり注意して見ることができました。

Aさんの4月の記録は、自分が何をしたかを中心に書かれている。これに対して10月の記録、11月の記録には子どもの姿の観察が記述されている。(\_\_\_\_線部)そして観察したことに関しての考察や感想が付け加えられる。(~~~~線部) Aさんのみならずかなりの数の学生の記録に、子どもの行動、言葉について詳細な観察が見られるようになった。子ども一人ひとりの状態に目を向けようという意識が出てきたのを感じる。一方で自分がなにをしたか、どう感じたかを中心に書き続けている学生もいる。しっかりした観察に基づいた保育者の対応という点が、今後の学生への指導の一つのポイントである。

もう一つ秋学期の記録に特徴的なのは、大学での講義内容をふまえた乳幼児理解に関する記述である。Aさんの記録には「これがアタッチメントなんだなあ」と記されている。他の学生の記述内容から例を挙げると、「3歳児の発達特性の「繰り返し」が使われている絵本を読み聞かせに選んだ」「3歳児がビールケースをはしっこにかためて時にはテーブルにもなったり、見立てることをしていた。2歳の子が、3歳児がテーブルに見立てていた場所に座ってきた。そしたら座っている子に、見立てている子が「これテーブルにしてるから座らんといて！」とちゃんと理由を話していた」「子どもたちを起こす時のテクニック（顔をさする。息をふきかける。）を保育内容健康の授業で習ったのでやってみると本当に子どもたちは起きてくれてよかった」などである。保育の専門科目とインターンシップなどの臨床科目が相互に補完し合って専門的な力量の形成につながると考えているが、これらの記述からある程度力量形成が図られていると考えられる。

春学期末のレポートに学生が選んだテーマは、「子どもの言葉の発達」「子どもの発達特性」「乳幼児の発達特性」など専門知識と観察を結びつけたもの、「絵本の選び方」「健康管理について」「発達が遅れている子への対応」など実践のなかで感じた課題、「子どもとの関わりで大事なこと」「先生見て！の大切さ」など子どもへの関わり方に関するものなどがあつた。いずれのテーマにもインターンシップという場を得て、保育についてしっかり考えようという意識がみられる。レポート提出にあたっては、日頃の記録用紙をきちんと振り返って書いていることがうかがわれ、蓄積の力をも感じることができた。

### (2) アンケートによる科目評価

学生はこのインターンシップをどのようにとらえているのか質問紙調査を行った。80%以上の学生が満足度において5段階のうち4と5の評価をしている。その理由は「子どもと実際に関われる」が多い。さらに自由記述で出てきたプラス面は、直接保育の現場に入って子どもの様子が見られる、先生の話聞ける、実習に行く前にどんな様子なのかわかる、などであった。逆にマイナス面については、方針が把握できない、インターンシップ生の立場があいまい、先生とのコミュニケーションの時間が少ない、評価規準がよくわからない、などが挙げられている。学生の指摘は、この科目の課題をも浮き彫りにしている。後にまとめて考察したい。

### 3-3 受け入れ先の評価

教育保育インターンシップの取り組みは、受け入れ先保育所の協力なくしては成り立たないものである。日頃から各保育所を訪問し学生の取り組みの様子を見ているが、来年度に向けて二つの保育所の所長と主任に話を聞く機会をもつことができた。二つの保育所の反応は対照的であった。

まずA保育所では、「その日に手が足りないクラスに入ってもらい、大変助かっている」「特別に配慮が必要な子どもについてもらっている」「学生はよく動き、積極的である」「来年度もぜひ続けてほしい」という反応であった。積極的に「なにをしましょうか」と聞きに来る姿勢が評価され、インターンシップ生が来る月曜は、学生の補助を考慮に入れて保育を考えていることがわかった。また、1ヶ月に1回ぐらい30分でも反省の時間をとれば、問題を共有できるという提案もいただいた。

一方B保育所では、「実習のように振り返りに基づいて指導ができないので、何を考えているのか把

握しづらい」「学生と子どもの関わりが保育の流れの邪魔をしていることがある」「午後の時間帯には学生のためにわざわざやることを設定している感じである」などの反応であった。今までの保育士養成の考え方に基づいて、観察実習、参加実習と積み上げることが必要だという指摘があり、インターンシップより保育実習の充実こそが大事なのではないかと考えていることがわかった。指導の時間については、記録を提出するなどして、学生のとらえ方を保育士が把握することも大事だという意見が出された。

こうした反応の違いにはいくつかの原因が考えられる。一つは保育所側のニーズ、もう一つはインターンシップに行く段階での個別の学生の状況である。保育所側のニーズを掘り起こすには、学生が少しでもプラスに働いたという実績が力をもつ。学生をいかに保育所で動ける存在にしていくかが問われる。取り組むべきは、インターンシップの事前指導の内容の検討、さらに保育所で起きた事象についての学生のとらえ方のフィードバックの充実であろう。現在記録用紙は大学教員に出しているの、保育所の先生から学生の取り組みやとらえ方等についての指導をいただくことがむずかしい。また時間の制約があって、なかなか先生方と話し合うことができないのが実状である。学生のアンケートでの指摘でも同じ問題が挙がっているので、先生方とのコミュニケーションをとれるような設定を考える必要がある。

両方の保育所から、時間設定について午前中に絞ってほしいとの要望が出された。保育の特性を考え、時間割の検討が必要である。

#### 4. 幼稚園における取り組み

##### 4-1 2008年度の実施状況

###### (1) 三木市教育委員会との協定とインターンシップ受け入れ幼稚園

三木市と関西国際大学との間には、2005年11月に連携協力に関する協定書が交わされており、その後発展して2007年6月には第1回「教育ボランティア地域連絡会」がスタートし、年2回の定期的な会合をもっている。

さらに2008年度からは「サービスマーケティング地域連絡会」と改称し、運営されることになった。ここで述べられている連携協力事項は①大学が実施するサービスマーケティング、インターンシップ、ボランティア活動等の学外教育活動の実施推進への協力、②教育実習を円滑に実施することへの協力、③教育委員会が実施する教員研修への協力、④教育委員会の実践的な教育研究活動への協力、⑤その他必要と認める事項、となっている。

この間に前後して、2007年10月～11月に三木市内の13か所の公立幼稚園を学科教員が訪問し、インターンシップと教育実習についての趣旨説明と協力依頼を行った。

その結果、各幼稚園の園長の自主的な判断により可能な所から受け入れていただくという姿勢で、13か園のうち5か園から協力可能との返事があり、その中からインターンシップ参加希望学生の住居の地理的条件を考慮して、2か園に2名ずつ計4名を2008年4月から受け入れていただくことになった。

###### (2) 三木市の公立幼稚園の現状

三木市の公立幼稚園は合計13か園あり、2008年4月現在で、計24クラス、全園児数は574人となっ

ており、やはり少子化の影響により一部の園を除いて少しずつ園児数が減少してきている。

今回、インターンシップの学生の受け入れに協力していただいた2か園はいずれも小学校の併設園であり、すぐ近くに位置する小学校との連携に力を入れており、行事等で交流を持っている。園長はいずれも小学校長が兼務している。

地域的には、A幼稚園はまだ周りに田畑が残る田園地帯にあり、4歳児23名、5歳児34名計57名2クラスの中規模園。一方、B幼稚園は住宅街に位置し、5歳児のみ23名1クラスの小規模園である。

### (3) インターンシップの活動内容

①履修学生：関西国際大学2年生 男子1名、女子3名、計4名

②インターンシップ先の幼稚園

1. A幼稚園 2名(男女各1名)
2. B幼稚園 2名(女子2名)

③職場体験活動の具体的な事例

幼稚園現場における業務体験の具体的な内容を、上記の2か園の事例から、第1次(4月28日、5月12日、19日、26日)、第2次(6月9日、16日、23日、30日、7月7日)、第3次(10月6日、20日、27日、11月10日、17日)に分けて紹介する。ただし、4次(12月以降)については本稿執筆時はまだ未確定のため省略する。

#### 1. A幼稚園の場合

第1次……子どもたちと園庭で遊ぶ。園の畑の雑草取り。チューリップの球根掘り。

室内遊び。絵本読み。

第2次……畑の雑草取り。取った雑草の搬送。スライムとシャボン玉作り。人工芝設置作業(プール遊びの準備)。ウサギの餌やり。園庭で子どもたちと遊ぶ。花壇の植物の植え替え。

第3次……製作(おみこし作り)の手伝い。給食指導(配膳補助。後片付け)。遊具(跳び箱など)の移動作業。落ち葉の掃除。水道の水あか落とし。花壇整備。クリスマスツリーの製作補助。

#### 2. B幼稚園の場合

第1次……製作(誕生バッジ作り)。園庭の雑草取り。絵本修理。配布資料のプリント。花壇整備。種まき。遊具修理(ペンキはがし)。

第2次……園外保育補助。畑作業(さつまいもの苗植え。ジャガイモ掘り)。絵本の読み聞かせ。発表会のプログラム作成。楽器運び。身体測定補助。

第3次……運動会のパンフレット作成。給食指導(配膳、掃除など)。製作(飾り物)。園外保育(公民館の作品展見学)補助。案内状作成(パソコン)。保育室清掃。健康調査の誘導。

④活動内容の考察

以上のように、活動のほとんどは直接保育とは関わりなく、その周辺の補助作業や環境整備である。教育実習とははっきり異なる様子がうかがえる。本来は管理作業員が担当する仕事かもしれないが、両園とも雇ってはいないようで、逆に園にとっては手助けをしてもらってありがたいという側面も見られた。

## 教育保育インターンシップⅡの現状と課題

両園の活動を比べると似たような活動内容に見えるが、微妙な違いも見られる。それは、A幼稚園は2名のうち1名が男子学生のせいか、比較的力仕事の多いものが多く、B幼稚園は、2名とも女子学生のため製作的な活動が目立つように思える。

また、両園とも季節の流れと一致しており、春から夏に掛けては「雑草取り」や「花壇整備」が多く、秋になるにつれ行事重視の様子がうかがえる。

### 4-2 記録の分析

#### (1) 毎回の活動記録を見ての内容分析

- ①今回、幼稚園のインターンシップに参加している4人は、いずれも将来、公立もしくは私立の幼稚園教員になることを意識しており、インターンシップに取り組む姿勢は意欲的であった。
- ②ただ、教育実習とインターンシップとの違いがあまり分からないまま現場に出たので、もっと子どもと関われるものと思っていたらしく、あまりにも保育とは異なる活動の連続で戸惑った様子が随所に見られた。
- ③そのためか、当初の2～3回の活動記録には、もっと子どもと関わりたいという要望がかなり色濃く出ていた。と同時に、「保育者はこんな仕事もするのだ」という発見が、驚きとなって表現されており、保育の仕事の奥の深さやおもしろさの一端に気付いたようでもあった。
- ④活動記録の書き方が、回数を追うごとに丁寧になってきている。周りが少しずつ見えるようになってきたようで、ただ単に子どもの様子や自分自身の動きを書いていたのが、それぞれの意味や意義は何かと、少しずつではあるが考えるようになってきている。

普段から「子どもの動き、発言には必ず意味がある」と言い続けてきた甲斐があったのかもしれない。

#### (2) 2回の小課題（ミニレポート）提出からの分析

学生には、「小課題」としてⅠ. 1日のスケジュール Ⅱ. 自分の担当した仕事内容 Ⅲ. 学び取れたこと Ⅳ. 感想 の項目でみたレポートを中間と期末の2回提出させた。

その結果からの分析は以下のとおりである。

- ①幼稚園のインターンシップに参加した4人が、言葉での表現方法は異なるものの、「自分のイメージしていた保育者とは、現実はかなり違う」と感じており、これまで描いていた「保育者は子どもの前に出てパフォーマンスをするお姉さん、お兄さん」ではないことが分かったようだ。
- ②また、保育は保育者が先導して進めるものではなく、子どもたちの自発性を待ち、自ら行動や発言できるようになるための援助者だという点に気づいた学生もいて驚いた。本来の保育者の姿がわかり始めてきたと感じられた。

いろいろなことにあまりにも先生が手を出さないので不思議に思っていたが、子ども同士のけんかの場面ですぐには止めようとせず、話し合いをさせて両者を納得させた場面に遭遇して納得したという。いい気づきをしていると言えるだろう。

- ③ただこれは、今回受け入れてもらっている幼稚園がいずれも公立のためで、子ども主体の保育が見えるからではないだろうか。これがもし私立幼稚園だったらなかなかこのようには読み取れなかったのではと思われる。なぜなら、いくつかの私立幼稚園はなかなか子ども中心の保育に持って行かず、保

育者主導型がまだまだ多く見られるからである。

(3) 期末(春学期)レポートからの分析

- ①保育者による環境づくりの大切さに気づいてきていることがうかがえる。すなわち保育者が子どもを遊ばせてあげるのではなく、遊びたくなるような環境を用意し、自発的に遊びだす工夫をしていることに気づいているのである。
- ②保育者の仕事の大変さとやりがいを身を持って体験し、将来希望している幼稚園教員という仕事が、単なる憧れからかなり強い要望に変わったと述べている。インターンシップでの経験が学生を成長させている、と言えるだろう。
- ③具体的な場面(けんか、ふざけて叩くなど)での対応が少し出来るようになってきた。また、うまく対応できなかったときも、深く考え、次もし同じ場面に会ったらこうしようという見通しがもてるようになっている。これも大きな進歩であろう。

4-3 受け入れ先の評価

12月1日にA幼稚園の副園長に、同3日にB幼稚園の主任にそれぞれ4つの観点からの約30分程度の意見聴取を行った。

質問事項は①本学のインターンシップ制度をどう思うか?(園での受け止めは?)

- ②今回のインターンシップの内容についてどう思うか?
- ③本学の学生2名について、何か感じることは?
- ④本学への希望、要望は?

1. A幼稚園の回答

- ①わが園にとっては人員面で大いに助かった。ただ、きちんとした指導が出来ず残念。ぜひ今後も続けて欲しい。お互いにプラス面が多い。子どもは、学生ではなく先生として見ているので、その自覚をもってほしい。
- ②当初は「草抜き作業」ばかりで戸惑ったかも知れないが、これも仕事と知って欲しい。こちらとしては忙しくて指導ができなかった点、申し訳なく思う。
- ③慣れからくる緊張感の欠如が気になる(上靴、はし等の持ち物の忘れ)。遊び感覚では困る。男女の2名だが、息が合っていて好感が持てる。子どもたちも懐いてくれている。「次、何しましょうか?」と聞きにくるので指示しやすい。

④巡回指導はできるだけ多いほうがいい。

2. B幼稚園の回答

- ①学生にとっては現場を知る大きなチャンス。ぜひこの機会を有効に活用してほしい。
- ②1クラスしかないので、保育に直接関わる機会が少ないのは了承してほしい。
- ③二人とも仕事が早くて驚いた。性格もよく問題はない。
- ④月曜はできれば避けて欲しい。(行事が少ない。子どもが保育に乗りにくい日。)

## 5. 成果と課題

2008年度の新科目「教育保育インターンシップⅡ」保育所・幼稚園の実施状況から成果と課題を述べる。

まず、成果の第1は、学生の学びの深まりである。

保育所・幼稚園とも、記録が回数を追うごとに、単に「子どもの様子」「自分のしたこと」の記述から行動の意味をとらえる記述に変わってきている。大学の講義での理解に加えて、現場で実際にかかわった子どもの様子から学生が自分で意味を導き出そうとする姿勢が育ってきたことは評価できる。学びの深まりが見られるのである。「教育保育インターンシップ」は先に挙げた文部科学省の調査研究協力者会議が指摘している「理論と実践とを結び付ける機会の不足」にある程度応えられる科目設定だといえるだろう。学生の記述からは、子どもの様子、行動の意味をとらえながら「どうしたらよいか」と考え、動いていることが伝わってくる。学びの深まりは実践的能力の開発につながると考えられる。

成果の第2は、自分の保育観をもとうとする姿勢である。

保育所では、学生はその場の一員として、子どもの行動に対して保育者がどういう対応をとるかを受け止め、学び取っている。その場の一員として、というところは非常に重要である。生活の場面では感情の起伏を目の当たりにし、さまざまな行動に出会う。まさに臨床的な視点を身に付けつつある。

幼稚園では、子どもの育ちをどのように教師が支えているかに気づき、子どもの遊び相手というイメージから脱して、保育の担い手としての仕事に気付くようになっていく。問題場面に出会ってどうしたらよいかを探る経験が、幼稚園教諭としての自覚につながるといえる。

次に、課題について述べる。課題の第1は、観察内容・活動内容のとらえ方のフィードバックの問題である。学生からも先生方とのコミュニケーションの問題が挙げられているが、体験活動が主となる現在の科目内容構成では、話し合いの時間がなかなか保証できない。学生の取り組みや子どもの様子にとらえかたについて、受け入れ側の先生方から指導を受ける機会が必要だろう。事前指導及びフィードバックという視点から、大学の学内講義のありかたもさらに工夫する必要がある。

課題の第2は、インターンシップと保育実習、幼稚園教育実習のそれぞれのねらいの明確化をし、系統性を確立することである。学生の目的意識にもつながる。先に紹介した華頂短期大学が課題に「教育実習での成果の検証」を挙げているが、本学の場合もこれは大きな課題となろう。

課題の第3は、受け入れ側のニーズの掘り起こしである。子育て支援は今や、地域、社会の関連各機関が協働して取り組むべき課題である。大学が、教員や学生の力をもって保育所や幼稚園にいかにか貢献できるかが問われる。

2009年度より本学教育学部は尼崎に移転し、子育て支援センターが開設される。地域のニーズの掘り起こしも含めて、科目内容の深化、発展を考えていきたい。

- i 山中文 石橋由美「保育士養成カリキュラムにおける公民館連携学生ボランティア活動プラン」『新見公立短期大学紀要』第25巻 2004年
- ii 松浦真理「幼稚園インターンシップの行方（前）」華頂短期大学『保育実践研究』vol.5 2004年  
同 「幼稚園インターンシップの行方（後）」華頂短期大学『保育実践研究』vol.6 2005年